鉄格子の向こう

霜月璃音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄格子の向こう

【Nコード】

N94450

【作者名】

霜月璃音

【あらすじ】

鉄格子の向こうに、男が一人。今日も、笑っている。

直接的ではありませんが、残酷描写が含まれております。ご注意ください。

（前書き）

前回の短編に引き続き、狂気を孕んだ内容となっております。また、直接的ではありませんが、残酷描写も含まれておりますので、苦手な方は十分にお気を付け下さい。

「ふふっ、くくく……ふふふふふっ……」

鉄格子の向こうに、男が一人。今日も、笑っている。

男の瞳に、真紅の夕日が映る。ふと手を見下ろすと、同じ色をしている。それで思い出すのは、正反対のアイズブルーの瞳。

笑う彼女は、最後に言った。こうすれば、あなたは永遠に私を忘れられなくなるでしょう？ と……。

薄い青の奥に、真紅の炎が踊る。彼女の胸を深々と貫く、鋭利に輝く銀色……。

銀の凶器を握るのは、男の手。それを包み込むのは、彼女の白い優しい手……。男の震える手を握ったまま、真紅の唇を不気味に吊り上げる。ちょうど、夜空に浮かぶ三日月のようだ。赤い赤い、歪んだ三日月……。もう一度。

ズブリと沈む、鋭い銀光。ドブリとそこから、真紅が溢れる。

男の手も、彼女の手も、つないだそこから、真紅に吞まれる。

消える薄青、歪む真紅……。

後に残されたのは、真紅の手。ただ、烙印のみだった。

「ふふっ、くくく……ふふふふふっ……」

鉄格子の向こうに、男が一人。今日も、笑っている。明日も、笑うのだろうか……？

(後書き)

こんにちは、霜月璃音です。

最近こういう作風のもので書きたくて仕方ないのは、自分の人生が平和だからでしょうか……？

かなり短いものですが、色の対比を中心に楽しんでいただければな、と思って書きあげました。いかがでしたか？ もしよろしければ、このような短いお話ですが、ご感想などをお聞かせ下さい。

このお話をお読み下さった皆様、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9445o/>

鉄格子の向こう

2010年11月16日02時29分発行